

# 国際イワナシンポに参加してきました

～北米や北欧のスケールの大きな研究に触れて～

北野 聡

2009年6月スコットランドの古都スターリングで開催された国際イワナシンポジウム（Charr09）に参加してきました。飛行機に乗ること十数時間、はるばる参加した学会のようすをご紹介します。

まずは学会のテーマでもあるイワナの話から。日本ではイワナといえば川にすむものと相場が決まっていますが、スコットランドのイワナ（北極イワナ：Arctic charr *Salvelinus alpinus*）は基本的に一生を湖で過ごします。今年は英国の進化生物学者チャールズ・ダーウィン生誕200年の節目、また自然選択を基本とした進化論「種の起源（On The Origin of Species）」の出版150年にあたっていたこともあり、学会でも北極イワナの急速な分化（Rapid Evolution）が大きな話題のひとつでした。学会が用意したTシャツ（写真1）にもダーウィンの顔とともに各地の湖で適応放散した北極イワナがダーウィン・フィッシュとして描かれていました。



写真1 学会のTシャツ

というわけで極東のすみっこに生息する我が国のイワナは今回の学会ではマイナーな存在でした。しかし、たまたま話をしたアイルランドの女性研究者からは「私は世界のイワナ属魚類のなかで日本のイワナが一番好き」という密やかな発言をいただき、まるで自分が告白を受けたかのように上気した気分になったのでした。なお、本州のように南方由来の猿と北方由来のイワナと一緒に生活している生物圏は世界的にも珍しいらしく、外国人研究者と話をするたびに話題になります。たまに外の目で自国の生きものや自然環境を見つめ直すのも面白い作業です。

それから、イワナは charr と標記されるのですが、一説には r がひとつの char が正しいとする意見や charr 説もあり、数年おきに開かれるこの国

際会議における重要な検討課題となっています。またスコットランドといえばスコッチウイスキーの本場でもあります。学会の余興ではスコッチの利き酒も用意され、様々な姿かたちのイワナの生息水域と最寄の醸造所を結びつける（極めて難解な）Charr-Whiskey クイズが出題されました（写真2）。残念だったのは、この余興がポスターセッションと同時に開催されたこと。ポスター会場に聴衆を多く集めようとした主催者のねらいは成功したのですが、どちらかということポスターはそっちのけで、皆がスコッチ・テイस्टイングに夢中でポスター会場は時間とともにただの酔っぱらいのたまり場になってしまったのでした。



写真2 ポスターセッションとスコッチ・テイस्टイング

研究発表を聞いてなかなか真似できないと感じたのは、北米や北欧での研究の地理スケール、時間スケールのとり方でした。緯度の違いをうまく研究に取り入れて温暖化影響を解析したり、数十年にわたる資源量変動のデータを扱ったり、日本人の研究者ではなかなか扱えないスケールの大きな研究に触れることができました。

学会後は、古都エディンバラのセブンヒルトレイルレースに出走したり、ロンドンの博物館の海で溺れたり、ウィンブルドンの試合に痺れたりと刺激的な旅行でしたが、これらについてはまた別の機会に紹介できればと思います。



写真3  
スターリング大学構内の  
ピーターラビット